

■社会基盤学科

人事を尽くして 天命を待つ

国際社会の不確実性は国内よりずっと大きいです。
国際問題に対処するには、不確実性に振り回されるときがないので、
どこかで踏ん切りをつける必要があります。
そのためには後悔せぬようベストを尽くすことが大切だと考えています。



加藤 浩徳 教授

国際プロジェクト研究室
1970年奈良県生まれ。1995年
東京大学大学院工学研究科土木工
学専攻修了。1999年博士(工学)
取得。研究分野は交通計画、交通
政策で、最近では国際交通学、国際
プロジェクト学に研究分野を展
開。2013年より現職。

□ 社会基盤学の目指す社会

社会基盤学科には6つのグループがあり、その1つである国際プロジェクトグループに私は所属しています。このグループの掲げる目標は大きく2つあります。

1つは「持続可能な国際社会の実現」です。私は、日本だけではなく世界が持続的に発展していくためには、世界中の人々が協力しながら諸問題を解決すべきと考えています。具体的には、貧困国支援や国際機関の能力向上等に我々の知見を活用しています。

もう1つは「日本企業の海外進出支援」です。人口減少に伴い経済が縮小していくなかで、日本がどうやって国際社会の中で生き残るかを考える必要があります。私は、日本企業が世界で活躍する方法についてインフラを中心に考えています。学科の他グループとも協力しながらこうした目標を達成することで、世界の人々が人間らしく生きることができ、かつ文化的・文明的な生活を営むことのできる豊かな社会を実現したいと考えます。

□ 日本の社会基盤学が世界に 貢献できること

私は、ミャンマー、ベトナムなどのアジアの国々を中心に全世界を対象としてインフラに関する様々な研究を行っています。そこでは、日本の過去の経験や知見を活用して各国の諸問題を解決できる技術や戦略を開発したり、新たな発想に基づいてこれまでにない社会的価値を提案したり、問題解決のため

の手続きを分析したりしています。例えば日本が世界に誇れる技術に高速鉄道があります。日本の新幹線の強みの一つは長い歴史があることです。そのため、新幹線整備のインパクトを実際に日本の事例で語るができます。日本が世界のリーダーの一員となった今、自分たちの開発してきた技術や経験を客観的に見直す時期が来ています。これまで培ってきた技術をさらに発展させるとともに、その知見を再解釈し適切な形で提供することで世界に貢献したいと考えています。

□ 社会問題を解決するための 社会基盤学

入学当初は、元々好きだった物理学と関心事である社会問題との接点を見つけることができずして。しかし、現在の社会基盤学科に入って、自然科学の考え方を活かして社会問題に取り組む方法があることを教わり、積極的に社会問題に取り組むようになりました。

修士2年のとき、大変衝撃的な出来事が起こりました。それは阪神淡路大震災でした。当時すでに助手になることが決まっていた私は、直ちに震災後の社会基盤のあり方に関する議論を手伝うよう言われ現地にも赴いたのですが、その中で社会への責任感と使命感を持って連日深夜まで熱く議論を交わす先生方の姿に強く感銘を受け、目指すべき研究者像を見いだしました。

その後国際プロジェクトの研究を始めた

のですが、最も印象深かった思い出はヤンゴンの交通問題に取り組んだことです。当時のミャンマーは軍事政権が続き国内の貧困状況は酷いものでした。私は交通の専門家としてヤンゴンのバス問題に取り組みました。指導学生とともに、現地の人と協力しながら調査し提案を報告書として現地政府に提出したところ、当時は他国からの支援がなかったこともありとても感謝してくれました。また、ミャンマーが市場開放した後、政府高官に再会した際、私たちの報告書を大事に持って、さらに提案内容にしたがって政策導入しようとしていたことに再度感銘を受けました。

学生には自分の研究が実際に国際社会の問題に貢献できることを是非経験してほしいですね。



現地調査を行った際のヤンゴンのバス
車両輸入が規制されている中、トラックの荷台を改造した粗悪なトラックバスが市内を走っており、安全性などに大きな問題が生じていました。

interviewer：三浦 友裕

Voice 1

● 社会基盤学科に入った理由

学科進学が一番のきっかけは防災への関心です。技術力が進歩している現代日本においても自然災害を完全に防ぐことはできず、ひとたび大規模な地震や水害が起これば甚大な被害が出ます。進学選択を控えた時期に熊本地震が起きたこともあり、防災は自分にとって興味のある分野でした。

学科を選ぶ際、社会基盤学の使命の一つでもある「災害による被害を減らして安全な社会をつくる」という点に強く共感しました。そのなかでも特にハード面を中心とした工学の技術力を学びたいと思い、社会基盤学科の設計・技術戦略コース*1に進学しました。

● おすすめの講義「導入プロジェクト」

2年生冬学期前半に開講されるこの演習では、隅田川に実際に架かっている橋梁の設計図をもとに、学科全員でその橋の10分の1模型を作ります。基本的に、図面の読み取り、材料調達、組み立てまで全て学生のみで行う形式で、進学直後のまだ学科同期の顔と名前も一致しない時期に行

うため作業のマネジメントが難しいです。この演習では橋の構造を理解するだけでなく、「皆で一つのものを作る」とはどういうことかという社会基盤特有の性質も身をもって体験します。社会基盤学科の学生は仲が良いと言われることが多いですが、これにはこの演習が寄与している部分があると思います。



新井 峻太 さん

社会基盤学科
河川/流域環境研究室
学部4年

*1 社会基盤学科は設計・技術戦略コース(Aコース)、政策・計画コース(Bコース)、国際プロジェクトコース(Cコース)の3コースからなる

interviewer：米澤 実保

Voice 2

● 研究生活について

私の現在の研究テーマは、三次元の点群データ*1に対して、データの補間や変化抽出、物体認識をするための手法を構築することです。この技術を用いることによって地表面や建物の外観など点群データから、自動運転を推進していくために必要な三次元道路地図の作成や、災害モニタリングができるようになって考えています。

最近の1日の生活としては、昼前に大学に来て7時間ほど過ごします。大学では研究や授業のみならず、自分の興味のある勉強をしたり、いろんな人と話をしたりします。私の研究自体は大学でない場所でもできるのですが、周りの人と話すことによって日々刺激を受けながら充実した研究生活を送っています。

● 社会基盤学科の魅力

社会基盤学はハード面からソフト面まで扱う対象が広い学問分野です。学科にはまじめで優秀な人がたくさんいる

ため、そんな周りの人たちが持つ、豊富で様々な知識に日々触れることができます。また、工学部全体に言えることだと思いますが、とくに社会基盤学科は、学科名の通り人々の生活改善に直結する学問であり、社会に貢献できる技術を生かすことが魅力です。



山野 俊樹 さん

社会基盤学専攻
地域/情報研究室
修士1年

*1 地表面や建物の外観などを3Dレーザースキャナーによって計測し、無数の3D座標点の形で表したデータ

interviewer：米澤 実保